

恋愛関係シナリオを読んだときに 生じた認知と喚起された 怒り強度との関連

榎原佐和子*

Relationship between Written Thoughts and Induced Anger in Dating Scenarios

Sawako SAKAKIBARA*

University students ($N=71$) read scenarios about romantic relationships and indicated the degree of anger they felt as a result of the scenarios. They also wrote their thoughts after reading the scenarios. The results of an ANOVA indicated that scenarios suggestive of a cheating partner induced the strongest anger. Correlation analysis showed a positive relationship between assertions of anger and the degree of anger. Moreover, the cognition that some damage was suffered had an effect on the degree of induced anger. The implications of these results for the prevention of dating violence are discussed.

key words: anger, cognition, prevention, dating violence

【問題と目的】

一般的に女性に比べ男性のほうがより攻撃行動を示すが (Eagly & Steffen, 1986), 恋愛関係では女性のほうがより攻撃行動を示しているという研究もある (e.g. Lewis & Fremouw, 2001)。怒りは恋人に対する暴力を生じさせる主な要因である (O'Keefe, 1997)。恋愛関係に限定しない一般的な怒りの理論では、認知が怒りに関連していると考えられている (e.g. 阿部, 2008)。怒りに関連する認知の研究では、対象者に怒りを喚起させるシナリオを提示した際に生じた認知が検討されている (Eckhardt, Barbour, & Davison, 1998)。恋愛関係における怒りに関連する認知要因の研究は少なく、日本ではほとんど見られない。そこで本研究では、怒りを喚起させる恋愛関係のシナリオを作成し、そのシナリオを読んだ際に喚起された怒りの強度を検討する。さらに、恋人への暴力につながる可能性が高いと考えられる強い怒りが喚起されたシナリオを読んだ際に生じる認知に焦点をあて検討を加える。

【方法】

シナリオの作成: 2011年10月、大学生・大学院生8名を対象に個別面談を実施し、50の恋人に対して怒りを感じたエピソードを収集した。それらの内容をより普遍的に大学生が経験するものになるよう整理し、最終的に各200字程度の15の恋愛関係怒り喚起シナリオを作成した。

調査対象者・質問紙の構成: 2011年11月から12月、

大学生・大学院生を対象に質問紙調査を実施した。回答時の負担を考え、15のシナリオのうち五つずつ含む質問紙3種 (A, B, C) が作成された。質問紙では、年齢・性別の回答後、五つのシナリオが提示され、その出来事が「自分に起こったと想像して」各シナリオを読んだときに喚起された怒り強度の評定 (1「全く感じない」から5「非常に強く感じる」の5件法)、さらにシナリオを読んだ時に頭に浮かんだ認知の自由記述を求められた。3種の質問紙合わせて295部配布し、194部回収した (回収率は65.8%)。本研究では、3種の質問紙のうち、最も回答者数の多かった質問紙A (男性31名、女性40名、 $M=20.71$ 歳) を分析の対象とした。

シナリオの概要: 質問紙Aに含まれた五つのシナリオの概要は、1. 飲み会で異性の隣に座っている恋人を見ている場面、2. 恋人にメールしたが返信がない場面、3. 恋人が他の異性と手をつないで歩いているのを見た友人に告げられた場面、4. デート中に恋人がイライラしている場面、5. 恋人に会いたいと告げたが断られた場面であった。

認知の評定手続き: シナリオごとに、対象者が自由記述した認知をKJ法 (川喜田, 1986) を用いて分類し、その分類に基づき、シナリオごとに認知リストを作成した (シナリオ3の認知リストはTable 1参照)。次に、臨床心理学が専門の評定者4人が各対象者の記述した認知を読み、それが認知リストの各項目に当てはまる度合いを5件法で評定した。記述された認知がその項目の内容と全く一致していない場合は0、完全に一致している場合は4とした。各認知項目に対する評価者の評定の平均値を、その対象者の各認知項目得点とした。シナリオ3の評定者間の一致率は.76-.83であった。

【結果】

各シナリオの怒り喚起強度を明らかにするため怒り喚起得点を従属変数として、シナリオと性別の2要因分散分析を行った。性別の主効果は見られなかった ($F(1, 69)=3.82$, $MSe=2.12$, $n.s.$) が、シナリオの主効果は有意であった ($F(4, 276)=59.86$, $MSe=57.23$, $p<.00$)。怒り喚起強度に関してシナリオ間で多重比較した結果、シナリオ2と5の間のみ有意差がなかった。喚起された怒りの強度はシナリオ3が最も高く ($M=3.86$, $SD=1.33$)、次いでシナリオ4 ($M=2.69$, $SD=1.36$)、シナリオ1 ($M=2.30$, $SD=1.03$) の順に高く、シナリオ2 ($M=1.63$, $SD=.90$) とシナリオ5 ($M=1.61$, $SD=.80$) が最も低かった。シナリオと性別の交互作用が有意であったので ($F(4, 276)=2.99$, $MSe=.96$, $p=.02$)、シナリオごとに性別の単純主効果を見るため t 検定を行ったところ、シナリオ3のみ男性 ($M=3.42$, $SD=1.54$) よりも女性 ($M=4.20$, $SD=1.04$) のほうが、有意に怒り喚起強度が高かった ($t(50.13)=2.42$, $p=.02$)。

次に、五つのシナリオのうち、最も強い怒りを喚起したシナリオ3の各認知項目と喚起された怒り強度との関連を男女別に見た (Table 1参照)。順位相関係数が高かった上位2項目は、男性の場合、「(むかつく等) ネガティブな感情 (怒り) の表明」($r=.51$)、「(問題ない、気にしない等) 比較的積極的受容」($r=-.38$) であった。女性の場合、「友人が見た異性は恋人の親戚である」($r=-.39$)、「(むかつ

* 明治学院大学大学院心理学研究科

Graduate School of Psychology, Meiji Gakuin University,
1-2-37 Shirokanedai, Minato-ku, Tokyo 108-8636, Japan

Table 1 シナリオ3の認知項目得点と怒り喚起強度との順位相関係数 (* $p < .05$, ** $p < .01$) (男女どちらからが .20 以上のもののみ記載)

認知項目	男性	女性
恋人の行為は浮気だ	.30	.18
恋人と別れる	.30	-.14
恋人に仕返しをする	.21	.05
ネガティブな感情の表明 (怒り)	.51**	.34*
ネガティブな感情の表明 (その他)	-.24	-.24
恋人に対する非難	-.30	.16
友人に対する非難	-.13	-.24
友人が見た異性は恋人の親戚である	-.13	-.39*
友人が見た人は恋人ではない	—	-.24
比較的積極的受容 (気にしないなど)	-.38	—
嘘をつくべきではない	.21	-.10
デートの約束を破るべきではない	—	-.24
恋人は自分を愛していない	.21	-.28

く等) ネガティブな感情 (怒り) の表明 ($r = .34$) であった。男性の場合, 「恋人が異性と手をつないでいた」という状況を「問題ない」と考えるほど, 女性の場合, 手をつないでいた異性を「親戚だ」と考えるほど, 喚起された怒り強度は低かった。

【考察】

喚起された怒りの強度: 被害を受けたという認知と, その被害の責任が特定の人にあるとする認知が, 怒り喚起に影響を与える (阿部, 2008)。恋愛関係は第三者の介入を拒む排他性を有する (増田, 1994)。シナリオ3では, 異性と手をつなぐという恋愛関係の排他性が破られる被害を受けたと認知され, また恋人が異性と自らの意志で手をつないでいる (ととれる) ため, 被害の責任が恋人にあると認知され, 強い怒りが喚起されたと考える。手をつなぐ行為は, シナリオ1の隣に座る行為と比べると, 恋愛関係のみで行うと考える人が多い排他性のより高い行為である (増田, 1994)。そのため, シナリオ1に比べ, シナリオ3は, 恋人から被害を受けたととらえる人が多く怒り強度がより高かったと考える。2番目に怒り強度が高かったシナリオ4は, イラつく恋人を見て不快になるという被害を受け, その被害の責任は恋人にあると認知されることが多く, 怒りが強かったのだろう。ただ, 「誰でもイラつくことはある」や「バイトで何か嫌なことがあった」等, 恋人の責任を減じてとらえる可能性のある認知を記述した者もあり, そのためシナリオ3と比べると喚起された怒り強度が低かったと推測される。

喚起された怒り強度の男女差はシナリオ3以外なかった。これは, 怒り喚起の頻度や強さに性差はないという先行研究 (大淵, 1987) とほぼ一致した結果である。恋愛関係における排他性は男女共に有するが, 女性は恋人との関係が唯一の親密な異性関係であることが恋愛の存続可能性を高めると考え, 男性よりも排他性を関係存続の予測因として重視する (増田, 1994)。そのため, 女性のほうが, シナリオ3の状況から被害をより受けたと感じ, より強い怒りを喚起したのだろう。また, どの行為を排他性の逸脱とみなすかにはほぼ男女差はないが, 「肩や髪に触れる」「手をつなぐ」等の比較的排他性の高い一部行為は, 女性が男性よりも排他性逸脱とみなす可能性が高い (増田,

1994)。このため, シナリオ1, 3共に, 恋人は排他性の逸脱ととれる行為をしているが, シナリオ3のみに男女差が認められたのかもしれない。

シナリオ3を読んだ際に生じた認知内容と怒り強度との関連: 女性の「友人が見た異性は恋人の親戚だ」という認知も, 男性恋人が異性と手をつなぐ状況を「問題ない」とする認知も恋人が排他性を逸脱していないことを意味するため, 恋人からの被害の認知につながらず, 怒りが喚起されにくかったと考える。これは怒り喚起を妨げる有効な認知的対処法であろうが, 男女で利用する認知に違いがあることを示している。女性のほうが排他性を重視するため, このシナリオ3の状況を問題ないとは認知できず, その代わりに友人の見間違えとしたり, その異性は親戚だとしたりしたのかもしれない。

男女とも, 「むかつく」「頭にくる」等の怒り感情を表明した記述と喚起された怒り強度が関連していた。怒り喚起には, 認知を媒介する過程と媒介しない衝動的な過程があり, それらが共に恋人への暴力につながっている (e.g. 阿部, 2008)。本研究では「頭に浮かんだ考え」を記述させたが, 衝動的に怒り喚起した者は, どのようにシナリオの状況をとらえたかに関する認知は生じず, それを記述できないため, 怒り感情自体を記述したと考える。しかし, 何らかの認知が生じていたがそれを記述しなかった可能性もある。今後, 恋愛関係における怒りに関連する認知要因の研究を行う際, 発話させたり, 個別面談する等, 認知の収集方法を工夫する必要がある。

本研究から, 恋愛関係でも被害と責任性の認知が, 怒り喚起強度に影響することが示された。一方, 衝動的怒り喚起過程の存在も示唆された。恋人への暴力に至る過程に関する詳細はまだわかっていない。今後, 本研究で用いたシナリオ等を使い, 怒り喚起後の行動意図や行動予測を尋ね, 恋人への暴力に至る包括的過程を明らかにすることが期待される。それにより効果的な恋人への暴力予防が可能となるだろう。

引用文献

- 阿部晋吾 2008 怒りの認知 湯川進太郎(編著) 怒りの心理学 有斐閣 pp. 19-37.
- Eagly, A. H. & Steffen, V. J. 1986 Gender and aggressive behavior: A meta-analytic review of the social psychological literature. *Psychological Bulletin*, **100**, 309-330.
- Eckhardt, C. I., Barbour, K. A., & Davison, G. C. 1998 Articulated thoughts of martially violent and nonviolent men during anger arousal. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **66**, 259-269.
- 川喜田二郎 1986 KJ 法 中央公論社
- Lewis, S. F. & Fremouw, W. 2001 Dating violence: A critical review of the literature. *Clinical Psychology Review*, **21**, 105-127.
- 増田匡裕 1994 恋愛関係における排他性の研究 実験社会心理学研究, **34**, 164-182.
- O'Keefe, M. 1997 Predictors of dating violence among high school students. *Journal of Interpersonal Violence*, **12**, 546-568.
- 大淵憲一 1987 成人の怒りにおける男女差 大阪教育大学紀要, **36**, 25-32.

(受稿: 2012.3.15; 受理: 2012.8.24)